

LUI「公募研究 A」成果報告書

研究課題（和文）：博物館の原理に関する研究
—空間・集い・経験

研究課題（英文）：Principles of Cultural
Institution: Space, Association, Experience
申請者名・所属先：新藤浩伸（教育学研究科）
海外招聘者名：なし

1. 研究の目的

本研究の目的は、「博物館とは何か」という問いに、博物館を構成する原理に注目し、可能な限り根本的に迫ることにある。

2. 研究開始当初の背景

いま政府は、文化経済戦略、リーディングミュージアム構想等を発表し、博物館の経済的価値に注目し、それに対し、経済原理に回収されない博物館の文化的意義を根拠とする反論もみられる。しかし、現状はこの両者の二項対立論が多く、矛盾もはらむ「博物館とは何か」という問いへの考察が深められていない。

3. 研究の方法

研究を進めるに当たり、しばしば注目される「コレクション」や「公共性」ではなく、「空間」「集い」「経験」という概念に着目する。

何らかの意図をもって間仕切られた空間に、人やもの、情報が集い、経験が生まれる。申請者はこれをコレクション以前の博物館の、さらには博物館を含む文化施設の根幹にある原理と捉え、【研究1】博物館をめぐる原理研究を検討する。【研究2】上記の概念について、教育学、歴史学、建築学、哲学、文化政策等関連領域の研究を整理する。【研究3】数館の博物館のケーススタディから（設立経緯～開館まで、開館後の職員や観衆の声等）、上記概念の意味を検証する。

以上の研究を、課題意識を共有する北垣憲仁氏（都留文科大学教授）とも議論しながら進める。同氏は「都留フィールドミュージアム」の運営に関わり、動物、地域、人を「みる」ことを重視し、博物館の根本原理について考察を深めている。

4. 研究成果

研究期間前半では、近年の博物館研究の成果を確認しながら、「空間」「集い」「経験」に関連する古典的な著作を読み進めた。そして都留フィールドミュージアムの活動を振り返りながら、参加者の経験の実態を検討した。

期間後半に新型コロナウイルス感染症が拡大し、研究は一時中断となった。研究3のケーススタディの部分を中心に縮小を余儀なくされたが、北垣氏とオンラインで博物館の歴史を中心に文献検討を進めた。主にルネサンス～17世紀に注目しながら、近代博物館の「前史」という位置づけに留まらない当時の多元的な歴史、さらには博物館を構成する原理、思想の厚みを発見するに至った。

2回のオープンセミナーでは、フィールドミュージアム参加者も登壇しながら上記の成果を報告し、学内外の多領域の参加者との意見交換をできたことも大きな刺激となった。

研究期間全体を通じて、「博物館とは何か」という問いに、まさにヒューマニティーズの視点から学際的に迫り、多領域のセミナー参加者と意見交換できたことは、本研究の最大の成果と言える。オンライン読書会はその後も継続中である他、申請者が担当する「博物館概論」の授業や、各地の社会教育施設での学習会にも研究成果を反映させている。

また、北垣氏には2019年度、2020年度と東京大学で博物館概論をご担当頂き、研究教育面で多様な交流ができたこと。そして、申請者が編集長を務める『月刊社会教育』（旬報社）に北垣氏が動物の子育てに関するシリーズを2021年に開始し、観察の可能性や生きものへの複眼的な視点を他領域へと投げかけていることも、重要な成果である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕

新藤浩伸（文責）「「表現の不自由展・その後」展示中止の経緯と今後にむけて」『月刊社会教育』2019年11月号、pp.46-48

新藤浩伸（翻訳文責）「新型コロナウイルス感染症問題へのユネスコの提言—ユネスコ生涯学習研究所のノートから」『月刊社会教育』2021年4月号、pp.52-59

北垣憲仁「シリーズ 動物の子育て」『月刊社会教育』2021年6月号から連載

〔学会発表〕

新藤浩伸、北垣憲仁、今井尚、前田太仁、伊藤瑠依「博物館の原理に関する研究—空間・集い・経験（1）」東京大学ヒューマンティーズセンター第23回オープンセミナー、2020年2月7日

新藤浩伸、北垣憲仁、今井尚、伊藤瑠依「博物館の原理に関する研究—空間・集い・経験（2）」東京大学ヒューマンティーズセンター第30回オープンセミナー、2020年12月18日

〔その他〕

新藤浩伸「新しい生活様式における公民館の役割」東京都昭島市公民館利用者懇談会学習会、2020年12月21日

新藤浩伸「西東京市ひばりが丘公民館30周年によせて」西東京市ひばりが丘公民館公開座談会 つなごう！ひばりが丘公民館の未来へ、2021年1月31日